



平原 卓著
Suguru Hirahara

読まずに死ねない哲学名著50冊

Forest
2545
Shinsyo

まえがき

哲学、という言葉に、どのようなイメージをもつでしょうか。

「哲学やってます」とマジメな顔して言われると、頭よさそうとか賢そうとかいった印象を受けるはずです。『哲学者のコトバ500』なんてタイトルの本があったら、読むとチョット頭がよくなりそうな気がしてきますね。

ただ一方では、役に立たない（金にならない）とか、うさん臭いと感じることもあると思います。

確かに、哲学と称するものの中には、いわゆる「俺あ哲学もってるからよ」的な人生哲学や、「真理はここにある（それを私だけが知っている！）」と主張しているカルトくさいものも少なくありません。たとえばこんな感じですよ。

「哲学を勉強してます」

「あ、そうなんですか、よくわかりませんが……何かすごいですね！」

「お金にはなりませんけど」

「……」

「そんなことより、宇宙の真理を知りたくありませんか(笑)?」

「……(こいつヤバイ)」

もちろん近代社会においては、他者の自由を侵害しないかぎり、どんな言論だって自由に行われていい。しかし、歴史に名を残しているような哲学者が、「私だけが真理を知っている」という預言者口調に陥っていることはほとんどありません。反対に哲学の歴史は、真理はそもそも存在しないことを示す過程だったと言っているくらいです。

真理をつかむことが哲学の課題ではない。ましてや、それを悟ることでもない。真理という概念自体が、一つの「背理」なのだ――。

長い時間をかけて、哲学はそうした洞察に行き着きました(ニーチェがその極致です)。

しかしこのことは、哲学が何の役にも立たないことを意味しているわけではありません。むしろ哲学は、真理が存在しないという深い了解を踏まえて、問うべき事柄を、私たちの生の意味や価値へと移してきたのです。

哲学はこれまで、普遍的な認識は可能か、よい社会とは何か、恋愛の意味は何か、豊かな生とは何かというような、現代に生きる私たちも抱くことのある問題を提起し、深く納得できるような解を与えてきました。本書で紹介する50の作品は、その営みのなかで生み出されてきた、哲学の結晶と言うべきものです。

そもそも哲学とは何か？

多少乱暴ですが、一言でまとめてしまうと、哲学とは「概念」によって共通理解を生み出していく営みです。哲学ではこのことを「共通理解の言語ゲーム」と呼んできます。

ゲームと言われると「？」と思うかもしれませんが、ポイントは、互いに一から問題を考えなおすことで、共通理解を新しく創出する営みであるということです。営み

である以上は、成功することもあれば失敗することもある。あらかじめ成功が約束されているわけではないというのが、ゲームという言葉のニュアンスです。

その意味で、哲学は困難に突き当たったときにこそ真価が試されるツールです。困難な状況においてなお、深い納得を生むような解を示せるか、そうしたものとして日々思考を鍛え上げているかどうか、学説の試金石となります。

どれだけ物知りだろうと、それが納得できる解につながらなければ意味がない。哲学に権威のための場所はありません。鋭い感受性と鍛え抜かれた洞察力で、問題の端緒をつかみ、共有できる問題の形に仕上げ、納得できる解を与えた人物だけが生き残り、読みつがれ、考えつがれてきた学問、それが哲学です。

哲学は概念の工芸

哲学の面白いところは、考えるための「材料」は、一人ひとりの生のなかにあるということ。心の動きに目をこらし、それをうまく概念へと仕上げる。その意味で哲学は、概念の工芸と考えることができます。出来のよい概念は伝わるし、出来

の悪い概念は伝わらない。シンプルですが、シビアでもあります。

その点、哲学の古典は、概念の伝統工芸と呼ぶべきものです。古典は古いからスゴいではありません。スゴいからこそ、何度も読まれ、取り上げられ、試されてきたのです。吟味に対する持続力や耐久性が、古典のもつ本質です。

ですので、古典を読む際には、私たち自身の時代の問題意識から試しなおす姿勢を忘れてはいけません。さもないと古典は単なる英雄列伝になってしまいます。列伝自体も、それはそれで面白いのですが、哲学として生かそうとするなら、哲学者を偉人と見なす態度は、思い切って全部ゴミ箱に捨てる必要があります。それが古典を「哲学的に」読む第一歩だと言ってもいいかもしれません。

そこで、いざ哲学書を手にとって読みはじめると、まずはその難しさに面食らうことでしょう。プラトンやデカルトなど、前提知識がなくても比較的容易に読み進めていくことができる場合もあれば、カントやヘーゲル、フッサールなど、そもそも何を言わんとしているのかさえ、ほとんどつかめない場合もあるはずです。

哲学も一つの学問である以上、ある程度の難しさは仕方ありません。誰でもすぐに

理解できるなら、学問の営みとして続くことはなかったでしょう。ただ、哲学が必要以上に難しくなってしまうことも確かです。

哲学は、一般の人びとの市民感覚で試されることによって生かされます。だからこそソクラテスは街中の若者たちに議論をふっかけ、デカルトは「世間という書物」を学ぶべく街へと降りました。そうした態度が忘れられ、知識階級の知的遊戯という色を帯びだすと、その瞬間から、哲学の「魂」は腐りはじめるのです。

哲学のない人生なんて!?

本書は哲学のガイドマップです。哲学者たちの残した作品を、できるかぎりかみ砕き、解きほぐすことで、哲学がどのように営まれ、受け継がれてきたかを示すことを目的としています。

私も哲学書を読みはじめたころはさんざん苦勞しました。当然、日本語に訳された本を読んだのですが、まるで日本語によく似た外国語を読んでいるようで頭に入っきませんでした。

しかし、私はふとしたきっかけでウェブサイトを「Philosophy Guides」を開設し、哲学書で学んだ内容を備忘録がてらアウトプットしていたのですが、その作業の過程で少しずつですが「哲学語」の翻訳にも慣れてきました。

そして、このたび本書を執筆するにあたっては、「哲学翻訳家」になったつもりで、さらにみなさんに理解しやすい日本語になるように工夫して書いたつもりです。

もちろん、哲学書にまったく触れぬまま生きるのも一つの道ですし、否定するつもりはまったくありません。しかし、古代ギリシア時代から受け継がれてきた人間の叡^{えい}智^ちに触れないというのは、あまりにもつたいないことではないか、という考えも一方ではもっています。

事実、多くの方々が関心をもって「Philosophy Guides」にアクセスしてくださいます。何に役立つかわからなくとも、哲学のない人生に飽き足らず、生き方を、社会を、恋愛を、学ばんとする。哲学書を読まない、読めない、という人も含めて、私たちのなかにはそうした欲求があるのは間違いないと思います。

私は本書で知識自慢をしたいわけではありません。自分の知識量など、哲学の巨人

たちから比べたら一寸法師のようなものです。しかし、哲学において重要なのは知識量ではなく、どれだけ優れた考え方、つまり原理をとともに共有できるかということですね。本書でピックアップした哲学者たちは、（全員が必ずしもそういうわけではありませんが）優れた原理を哲学のテーブルの上に置いてきました。それをどう受け止めるかは、私たちに託された問題です。

私は哲学の可能性を信じています。この世界を否定するためではなく、よりよい世界、よりよい生の可能性の条件を取り出し、その実現を可能にするための原理をつくり出すために、哲学を生かすことができるはずですね。本書がその一助となれば、筆者としてそれ以上の喜びはありません。

もくじ

読まずに死ねない哲学名著50冊

まえがき

参考・哲学歴史チャート

哲学書を読む前に知っておきたい5つの心得

第一部 古代ギリシア——宗教から概念による世界説明へ

01 ソクラテスの弁明 プラトン 24

02 饗宴 プラトン 31

03 パイドロス プラトン 39

04 国家 プラトン 51

05 形而上学 アリストテレス 60

06 政治学 アリストテレス 67

3

15

22

第二部 中世——キリスト教神学に取り込まれた哲学

07	人生の短さについて	ルキウス・アンナエウス・セネカ	74
08	告白	アウグスティヌス	80
09	神学大全	トマス・アキナス	89
10	君主論	ニッコロ・マキャヴェリ	95

第三部 近代——普遍性を探求する

11	方法序説	ルネ・デカルト	104
12	情念論	ルネ・デカルト	112
13	リヴァイアサン	トマス・ホッブズ	119
14	エチカ	バールーフ・デ・スピノザ	129
15	モナドロジー	ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツ	135
16	人間知性論	ジョン・ロック	141
17	市民政府論	ジョン・ロック	147
18	人性論	デイビッド・ヒューム	154
19	人間不平等起源論	ジャン・ジャック・ルソー	160
20	社会契約論	ジャン・ジャック・ルソー	168
21	純粹理性批判	イマヌエル・カント	175

第四部 現代〈I〉——ニーチエとハイデガー

27	自由論	ジョン・スチュアート・ミル	224
26	功利主義論	ジョン・スチュアート・ミル	219
25	死に至る病	セーレン・キルケゴール	210
24	法の哲学	ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル	200
23	道徳および立法の諸原理序説	ジエレミー・ベンサム	195
22	実践理性批判	イマヌエル・カント	187
28	悲劇の誕生	フリードリヒ・ニーチエ	230
29	道徳の系譜	フリードリヒ・ニーチエ	238
30	権力への意志	フリードリヒ・ニーチエ	246
31	空想より科学へ	フリードリヒ・エンゲルス	257
32	時間と自由	アンリ・ベルクソン	268
33	プラグマティズム	ウィリアム・ジエイムズ	276
34	現象学の理念	エドムント・フッサール	282
35	イデー	エドムント・フッサール	291
36	一般言語学講義	フェルディナント・ド・ソシュール	301
37	論理哲学論考	ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン	313

第五部 現代(Ⅱ)——メルロポントイ・デリダ

38	哲学探究	ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン	325
39	存在と時間	マルティン・ハイデガー	337
40	形而上学入門	マルティン・ハイデガー	347
41	行動の構造	モーリス・メルロポントイ	360
42	知覚の現象学	モーリス・メルロポントイ	369
43	存在と無	ジャン・ポール・サルトル	379
44	悲しき熱帯	クロード・レヴィ・ストロース	387
45	エロティシズム	ジョルジュ・バタイユ	397
46	人間の条件	ハンナ・アーレント	404
47	革命について	ハンナ・アーレント	414
48	全体性と無限	エマニュエル・レヴィナス	424
49	言葉と物	ミシェル・フーコー	437
50	声と現象	ジャック・デリダ	446

あとがき

索引

471 461

参考：哲学歴史チャート

本文に入る前に、まずは哲学の歴史の全体像を確認しておきたいと思います。

- 古代…哲学の始まり。神話による世界説明から、概念による世界説明へ。
- 中世…キリスト教の時代。「哲学は神学のはしため」。
- 近代…「自由」の時代。道徳、社会の原理的構想。
- 現代…反近代、反哲学の時代。裏切られた近代の理念と、再建のきざし。

古代

ヨーロッパ哲学は、紀元前7世紀の古代ギリシアにて誕生しました。

哲学の祖タレスは、ギリシアのミレトスという都市で活躍しました。当時のミレトスは、エジプトやメソポタミアといった地域との交流が活発で、いまでいう国際都市

のような地方でした。タレスは、ギリシア神話による世界説明が普遍性をもたないことに気づき、代わりに「水」という概念を世界説明の原理として採用しました。ここに哲学が誕生します。

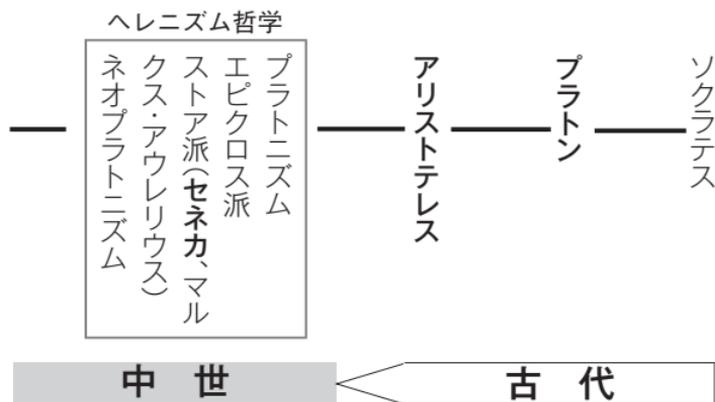
古代ギリシア哲学におけるビッグネームは、プラトンです。師ソクラテスの影響のもと、プラトンは世界を物理的な秩序から、意味と価値の秩序として捉えなおすことで、哲学の歩みを大きく進めました。

善や美といった諸価値の「本質」を探求するという態度は、プラトンによって打ち立てられました。

【凡例】

影響 ←———— 批判 ←————

*太字の人物は本文で作品を紹介。



中世

中世に入ると、ヨーロッパにおけるキリスト教の発展を受け、哲学はキリスト教のもとに置かれ、「スコラ哲学」として営まれます。

この時代の哲学のあり方を端的に示すものに、「哲学は神学のはしため」という言葉があります。哲学は信仰を完成させるかぎりで価値がある。こうした考え方がスコラ哲学の特徴です。

代表はトマス・アキナス。アキナスは神を原理とする体系を打ち立てることで、信仰を一本化し、宗派対立を調停しようとして試みました。

ルネサンス哲学

マキヤヴェリ
エラスムス
モンテーニュ

王権神授説

ボダン
フィルマー

スコラ哲学

アンセルムス
アキナス
スコトウス

アウグスティヌス

社会契約説

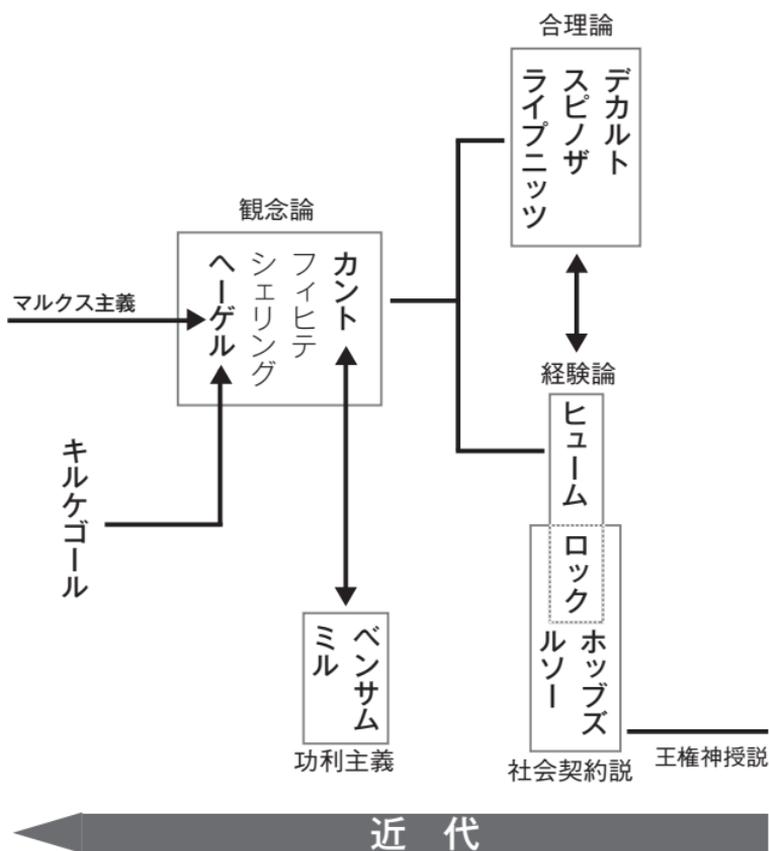
中世

近代

近代を言い表す最大のキーワードは「自由」です。

ルネサンス期を経て、数学や自然科学が発展するにつれ、キリスト教の絶対性に疑問が投げかけられはじめます。その結果、人間が神の被造物であるという観念はほぼ不可逆的に崩れていき、それと平行して、人間は一個の存在として等しいはずだという理念が成立してきました。

中世では、人間は独力では



真理を探求することも、善を目がけることもできないとされてきました。真理も善も、人間の知性だけで到達することはできず、最終的にはただ神の「恩恵」によってのみ可能となるというのが中世スコラ哲学の前提でした。

近代に入り、神の存在が背景に退くにつれ、そうした見方が転換しはじめます。人間は自分の理性によって、何が真であり、何が善であるかを知ることができる。こうした洞察に達したとき、「道徳」という観念が生まれました。

中世では、道徳は成立の余地がありませんでした。というのも、私たちが何をなさねばならないかについては、ただ神の言葉のみが教えると見なされていたからです。道徳の理念とともに、近代社会の理念が展開してきます。世界の秩序は神によって定められているわけではない。私たちは自分自身で、誰もが自由に、自分にとっての「よい」を追求できる社会を構想することができますはずだ。ホッブズやルソー、ヘーゲルといった近代哲学者たちは、それぞれの状況でこの課題に取り組み、答えを与えてきました。

現代

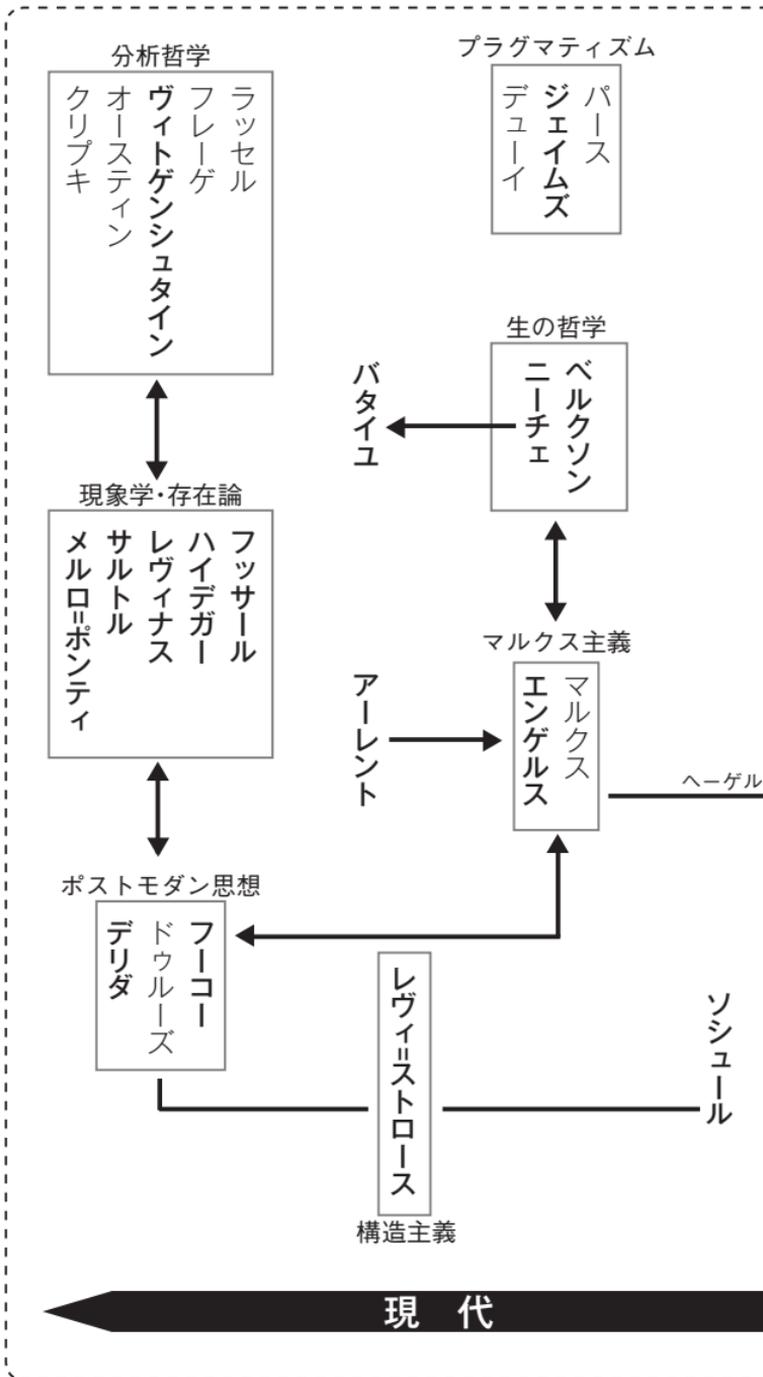
現代は、哲学にとって複雑な時代です。

産業革命の進展とともに、近代哲学の描いた理想の実現が期待されましたが、いざフタを開けてみると、近代社会は巨大な格差を生み出すシステムであることが明らかとなりました。

そうした「矛盾」を鋭く見抜いたマルクス主義やポストモダン思想は、反近代の立場から、近代哲学に対し集中砲火を浴びせています。

一方、近代哲学が生み出した理念を受け止め、それを徹底的に鍛え上げる動きも見られます。認識論ではニーチェやフッサール、社会哲学ではアーレントといった哲学者たちがこの課題に取り組みました。

現代は、学説の評価が確立しづらい時代です。世代が入れ替わるまでは玉石混淆の状態が続くでしょう。わずか数年で古典よりも古ぼける化石もあれば、光り輝くダイヤモンドの原石もあります。それらを見分けるのは一筋縄ではいきませんが、哲学の基礎教養と、一から自分で考えなおすという「自律」の意識が鍵となります。



哲学書を読む前に知っておきたいの5つの心得

- 1 **あきらめずに、粘り強く、自分の頭で考えながら読む。**
 哲学者も私たちと同じ人間、同じ理性をもっています。地道に読み進めれば、必ず腑に落ちる瞬間に出会えます。
- 2 **動機をすくい取るように読む。**
 「なぜ、こんなことを論じているのか？」の答えを追う姿勢で読む。枝葉末節にこだわらない。いったん著者が目がけている方向性をつかめれば、可読性と理解度がアップ。
- 3 **繰り返し読む。**
 一回読んだだけで理解することはほぼ不可能。古本に出せないくらい、メモを書き込みながら読む。
- 4 **仲間と読む。**
 一人で読むと、ふと苦しさや寂しさに襲われることも。できるだけ仲間を見つけ、ともに考え、ともに話す。時には読書会も開催し、終了後はともに呑む。継続は力なり。
- 5 **名を残した哲学者だからといって、必要以上に畏敬の念を抱かない。**
 哲学者＝文章の達人ではない。読んでいてこっちがバカなのではと自信喪失するほど、理解しづらい文章（悪文）もある。読者を放ったらかしにして、独善・独断で書き散らす哲学者も少なくない。主張が原理的かどうか確かめながら読むのが大切。

第一部

古代ギリシア

- 宗教から概念による世界説明へ

title: 01

ソクラテスの弁明

「よく」生きることについての哲学

プラトン(前427～前347年)

魂ができるだけすぐれたものになるよう、ずいぶん気をつかうべきである。

——『世界の名著6』収録「ソクラテスの弁明」田中美知太郎・訳、中央公論社

真とは何か。善とは何か。どのように生きることが「よい」のか。私たちは普段の生活を送るなかで、こうした問いに囚われることがある。古代ギリシアの哲学者プラトンもその一人だった。プラトンは師のソクラテスに、本当の「よい」生き方とは何かと問い、力強く答える哲学者の姿を見た。

よく生きるとはどういうことか——？

ソクラテス^{*}、そしてプラトンは、このテーマに対して哲学の歴史上初めて取り組んだ哲学者だ。

*ソクラテス(前470～前399年)

古代ギリシアの哲学者。アテネで活動した。著書を残さず、彼の思想は弟子のプラトんによって伝えられた。

本篇はプラトンの初期対話篇だ。

アテナイ(現在のアテネ)を中心とするペロス同盟と、スパルタを中心とするペロポネソス同盟との間で起きたペロポネソス戦争が、アテナイ側の敗北により終結した5年後の紀元前399年のこと。戦争の敗因を哲学者に負わせようとする政界の有力者アニュトスの手先だったメレトスが、「国家の信じる神々を認めず、青年を墮落させた」とのかどでアテナイの法廷にソクラテスを公訴。

本篇は裁判を見守っていたプラトンが、ソクラテスによる弁明の一部始終を記録したものである。

「真実」のみを語ろう

当時のギリシアでは、弁論のテクニクを教えるソフィスト^{*}という職業が大きな力をもっていた。政治家になり、世間的に成功するためには、弁論がうまくなければならなかったからだ。聴衆の心を動かし、自分に有利なように議論を進められるかどうか、当時の弁論において重要視されることだった。

*ソフィスト

前5世紀〜前4世紀初期にかけてアテネを中心に、主に富裕層から授業料を受け取って知識や弁論術を伝えていたギリシアの知識人。詭弁家と訳されることからわかるように、彼らは真理や倫理的な問題よりも相手を説得、打ち負かすことに重きを置いていた部分があり、悪評も多かった。

そんな背景もあり、ソフィストたちに告発されたソクラテスは、弁明の冒頭、皮肉を込めて次のように言う。

「アテナイの人びとよ、私を告発した者たちは素晴らしい弁論を行った。あまりにも素晴らしいため、私は自分を忘れそうになるところだった。一方、私は、弁論はうまくないし、そもそも裁判所に来たことさえない。だから諸君には、ぜひ、私の言葉遣いではなく、そこで言われている内容が真実であるかどうかにのみ注意を払ってほしい」

要は、言葉遣いや表情、声によるバイアスを外し、自分の言葉のなかから、ただ「真実」のみをつかみとってほしいというのだ。

では一体、その「真実」とは何だろうか。

無知の知

ソクラテスは弁論の途中、自分はソフィストとは異なる知恵をもつと語る。それが「無知の知」*だ。学校の教科書で一度は目にしたことがあるだろう。しかし、この言

*無知の知
無知であることを自覚した時点で相手よりも優れていること。また、真理の探求へのあるべきスタンス。

葉が生まれたきつかけを知っている人は意外に少ないのではないだろうか。

ソクラテスは言う。私はデルポイの神殿にて、「自分よりも知恵のある人はいるか」と尋ねたことがある。すると「誰もソクラテスより知恵のある人はいない」と託宣たくせんが下された、と。

その真偽はともかく、ソクラテスはこの託宣に驚きを覚えた。なぜならソクラテスには、自分が知恵あるものではないという自覚があったからだ。

なぜ無知な自分よりも知恵がある人がいないのか。初めソクラテスにはそれが解せなかったが、ある政治家との議論を思い出したとき、神託の意味を理解することができた。

「確かに彼には、世間での暮らし方についての知恵はある。しかし、私たちが本当に知るべきことである『善』や『美』については何も知らない……」

このちよつとしたことで、わたしのほうが知恵があることになるらしい。

つまり、わたしは、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことで、

——まさっているらしいのです。

——前掲書——

ソクラテスは、この政治家にかぎらず、賢人として名をはせる人物を訪ねては議論を繰り返したが、やはり彼らも世間のつまらない知恵ばかり身につけ、それでいて何でも知っているふうに語る。

この態度は、「自分は無知だ」という自覚に立って、本当に考えるべきことについての探求を一から始めようとするソクラテスとは対照的だ。

魂の配慮こそなすべきこと

本当に考えるべきことは、どうすれば世間で成功できるかではなく、よく生きるとは何かである。だが、そもそも、よく生きるとはどういうことか。この問題について、ソクラテスは、「魂の配慮」というキーワードを使って聴衆に論じていく。

「たとえ釈放されたとしても、私は神に従い、次のように人びとに説き回るだろう。君たちはアテナイという偉大なポリス*(都市国家)の市民でありながら、どれだけ多く

*ポリス

前8世紀頃からギリシア各地にできた小規模な都市国家。

の金銭を自分のもののできるか、どれだけ自分の評判、地位を高められるかということばかり気にかけている。だが本当に行うべきは、『魂』ができるだけ優れたものになるよう配慮することだ」

ソクラテスが考える「よく生きる」ことの核心は次のとおりだ。

「魂」を優れたものにするためには、それを気遣う必要がある。どれだけお金を支払っても、あるいは、容姿を磨いても、内面の「魂」は優れたものにならない。自分の内面を振り返り、「魂」を「よい」方向に向け替えることによってのみ、「魂」は優れたものになる。

新しい倫理観を探求した哲学者ソクラテス

本篇で描かれているソクラテスは、確かになかなかの変わり者だ。

「神に選ばれた自分が人びとを批判し、魂を配慮するように促すことは誰にも止められない」

ソクラテスの主張を一言でまとめるとそういうことになる。

だが、本篇を読むと、プラトンにとってソクラテスとは、それまでの文化や習俗の価値観にとらわれることなく、何が「よい」ことであるかについて、「無知の知」というゼロ地点から根本的に問い直し、探求した哲学者だったことがよくわかる。

ソクラテス自身は裁判に敗れ、みずから毒杯をあおって死を選んだが、「私たちが本当に行くべきは、善とは何であり、美とは何であるかを知ることである」というソクラテスの確信は、『パイドロス』(39ページ)や『国家』(51ページ)といったプラトンの代表的な対話篇のメインテーマとして受け継がれ、より深められていくことになる。